

鴨東通信

春

2011.4 No.81



●知られざるライバル③

丹波忠茂と丹波長世

細川涼一

●ていつたいむ

人間田能村竹田の姿を求めて

宗像健一

●エッセイ

「倭寇の会」のこと

山内晋次

会津の民俗に学ぶ

佐々木長生

●リレー連載 世界のなかの日本研究⑥

ロシアにおける日本史の研究

シャバリナ マリア

●史料探訪

豊蔵坊孝雄筆「田中宗清石清水八幡宮立願文案写」

川畑 薫

たのむらちくでん 田能村竹田 基本画譜

宗像健一編著

〔全二巻〕
図版篇・解説篇

※田能村竹田(安永六年〜天保六年)は資性文雅を好み高才多能、詩歌・文章・書画・茶・香みなに通曉。池大雅、与謝蕪村のあと、岡田米山人・浦上玉堂より少しくれて登場し、青木木米・頼山陽・浦上春琴・岡田半江らとわが国南画の隆盛期を築いた。

※図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で収録。解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。

※田能村竹田研究では他の追隨を許さない編者による作品選別は、今後の研究の基盤となる。

※美術史はもちろん、豊後(大分県)の地誌編纂に携わるなどした竹田の多才にあわせ、煎茶・漢詩・儒学・歴史など広範な研究に大いに益する。

◎図版篇◎

- 基本作品(カラー58点)
- ・ 作画の変遷を辿るうえで重要な作品
- 補遺Ⅰ(カラー37点)
- ・ その他の重要な作品
- 補遺Ⅱ(モノクロ36点)
- ・ 初期作品を中心に、割愛しがたい作品を過去の刊行書等から複写
- 補遺Ⅲ(モノクロ9点)
- ・ 関連する資料的作品等

◎解説篇◎

- 総論
- 解説
- ・ 基本作品58点を詳細に解説(作品をモノクロで再掲)
- 題詩等・落款
- ・ 題詩の翻刻と落款を原寸で収録
- 印譜(2色刷)
- ・ 主要印59顆を原寸で収録
- 年譜
- ・ 各事項の出典資料を明記(30頁)

竹田・南画研究に必携
新たな地平を拓く決定版



【お詫び】震災の影響により紙材が調達できず、現在刊行時期のめどがたつておりません。ご迷惑をおかけいたしますが、今しばらくお待ちくださいますようお願いいたします。

▼B4判変型・総三九四頁
定価二九、四〇〇円

丹波忠茂と丹波長世は、鎌倉幕府の公家将軍宗尊親王の医師である。二人のうち、采女正うねめのかみ（のち典薬頭・施薬院使せやくいんし）の忠茂は建長四年（一二五二）四月一日、陰陽師の安倍晴宗とともに宗尊親王に「医陰道」として供奉して鎌倉に下向した。

摂関期の丹波雅忠以来、典薬頭と施薬院使を兼帯できたのは丹波氏の嫡流であるから、公家将軍の誕生とともに、公家政権でも最高の官職を持つ丹波氏嫡流の医師が鎌倉に下向したことがわかる。一方、玄蕃頭げんぱのかみ長世は、父典薬頭丹波時長が摂家将軍藤原頼経・頼嗣の侍医であったのを承けて宗尊親王に仕えた、父子二代に亘って鎌倉に滞在した医師である。

二人のうち嫡流の忠茂は、『吾妻鏡』でも宗尊親王の侍医としての記事しか見出せないが、庶流の長世は北条時頼の治療も行っている。西大寺叔尊が弘長二年（一二六二）に鎌倉に下向した記録『関東往還記』によると、叔尊とその弟子の盛遍もろくが病気になった際、忠茂は宗尊親王の乳母である一条局の命によって往診しているのに対して、長世は北条時頼に命じられて往診している。丹波氏

でも嫡流の忠茂は宗尊親王の主治医として、将軍勢力に属していたのに対して、長世は北条氏得宗家の医師化していたものであろう。

忠茂の治療で注目すべきは、文永三年（一二六六）四月七

知られざるライバル③

丹波忠茂 と 丹波長世

細川 涼一

専門の主治医である忠茂より自由に活動できたのである。

（ほそかわ・りょういち 京都橘大学教授）

日、宗尊親王が蚊に刺された腫れ物を蛭飼ひるがひ（蛭食。腫れ物の悪血を蛭に吸い取らせて治療すること）によって治療していることである。伝統的な治療術というべきであろう。一方、長世は弘長三年（一二六三）十一月十六日に宗尊親王の御息所みやすどころ（近衛宰子。北条時頼の猶子）の着帯（懐妊して五ヶ月目に、岩田帯を締める儀式）に侍したが、二十二日の北条時頼の死去に際して医术を施したため、その死穢によって翌二十三日（時頼の葬式の日でもあった）、宰子の出産に従うことを辞退している。庶流の長世の方が、宗尊親王

●周辺史料から調べ上げる

——このたび宗像健一先生編集による大著『田能村竹田基本画譜』全2巻を刊行します。そもそも田能村竹田とはどのような人でしょうか。

竹田は、安永六年（一七七七）、豊後国岡藩（現在の大分県竹田市）の侍医の家系に生まれました。江戸時代後期の文化・文政期から天保前半期に活躍した南画家で、南画の隆盛期を現出した、中心的画人です。また、非常に多才で、詩歌・文章・書画・茶・香に通暁した文人でもありました。

——先生が竹田の研究をはじめたきっかけはどのようなものでしょうか。

大分県立芸術会館がオープン後、——当時は美術館ブームといった感じで、美術館がほとんど地方にできていた時期です——美術史をやっているのだから古い時代を担当せよということ、地元出身の竹田の分野を担当になった、それがきっかけです。単純な話ですが（笑）。

担当になってみると、すでに立派な本が何冊も出ているし、調べる分野、研究する部分がないようにみえたのですが、とりあえず全部見直してみようと思いました。たとえば、書簡には

ていーたいむ

人間田能村竹田の姿を求めて

むな かた けん いち
宗像 健一
(大分市美術館学芸顧問)

ふつう書いた年は記入しませんので、それらの年代考証を見直していききました。また、地元で新しい史料が出てくることもあり、それと既存の史料をくらべてみると、竹田の事跡について、それまでいわれていたことを考え直した方がよいだろうというようなことが出てきました。やらないといけない部分も意外とあるな、ということにだんだん気がつきだしました。

美術史というのは、当然絵画の変遷をたどるわけですが、立派な絵があるからといって単純にそれを並べるだけではだめです。こういう絵が出てきた、その理由は何かをはっきりさせないといけません。南画の場合、作画の動機や環境を賛（きん）に書いていますから、おおかたはわかりますが、詳しくは書いていません。成立した背景を周辺史料から調べ上げて、どういう存在の絵なのかを、一つ一つはつきりさせていかなないと、本当のことは捉えられないわけです。それを抜きにして、絵だけから判断していくことも重要でしょうけれど、両方ないといけないと思います。

例は悪いですが、「この犯人は絶対間違いない」と勘で思ってもだめで、それを証明してい

かないといけない。殴った棒をどこに捨てたと言っても、棒を見つけ出さないとだめです。南画というのは、そこまでやらないと正確に捉えにくいものです。

——そのような史料に基づいた綿密な考証が、解説篇に結実していますね。基本作品58点の解説は詳細を極めています。

史料に裏付けされたものを中央の先生方に提示していくのが、地域に根ざした研究者の義務ではないかと思っています。

竹田の人間的な部分に関しても、今まで言われていることは事実と違うところがあります。南画の研究にはそういう傾向が強いのかもしませんが、たとえば、ある時期までは好事家という方が調べていき、事実と違うことが定着してしまったということがあります。政治家になったなら大成していたという通説もその一つで、ある研究者が、岡藩に三つある田能村家を混同して、竹田の実際の家ではなく、もつと石高の高い家系の出したのです。そうすれば石高も高いし、政治家としてもやっていけたかもしれないと考えるのも当然です。間違いの背景には、必ずそういう理由があるんです。

また、文化八年（一八一一）の百姓一揆の際に、藩に建言書を提出したということが言われてきましたが、調べていくと、どうも提出はしていません。上司の日記が出てきて、それを見ると、提出を諫めており、書くことは書いたが提出はしていませんのです。

竹田はほとんど目が見えなかったということについても、検証作業をせずに書いている本があります。すると、それを信じて、

目の見えない人が書くものはどういふものになるか、という方面から竹田を研究しようとする人も出てきます。しかし、竹田の目が悪かったことは確かでしょうが、ほとんど目が見えなかったということはありません。遠くのものが見えた記述がきちつと残っています。第一かなり目が見えないとあんなしつかりした書簡は書けません。

●「わかってくれ」という叫び

——竹田の絵の特徴はどのようなものでしょうか。

明確に、自分の理想とする世界を絵で示そうとしています。文人画というのは基本的にはそういうものですから、大枠で言うとしたような表現になるかもしれませんが、竹田の場合は非常に理知的な構成で、強烈に自分の理想を表現しようとしていて、読み取るわれわれに「ああ、そうか」とわかるようにしているのです。

若いころから画面に規律を持ち込もうとしています。文化八年、竹田三五歳（以下年齢は全て数え年）になると、前景部に立てた樹木を高く立ち上げ、前・中（後）景部を直接的に関連付ける形の山水図を試んでいます。また、やがて、樹木を活用して、前・後景部の緊密性を高め、画面を前・中・後景部の三部によって構成し、理想の地である主山が後景部の中央部に厳として聳（た）える形になります。

文政九年（一八二六）一〇年、五〇歳で行った長崎遊学は竹田の画風にとって大きな転機になりました。一時期はスランプに

陥り、半年も描けない時期が続いていましたが、ある日、風雨を眺めていると「意の会する所有を覚え」て、「風雨渡谿図」という絵を描きます。このときに、観る者の視線をS字型に、画面下部から上部の空間へと導き上げる形の画面構成法を編み出すのです。その後、これより前すでに蘆の姿、樹幹・樹枝の働きなどを活用して、観る者の視線を画面の中枢部へと導く手法を用いていましたが、さらに、それを新たな形で導入して、観る者の視線をより効果的に、画面上部の余白部へと導くスタイルを達成しました。画面上部の余白とは、竹田の場合、理想の世界のことです。全てが理想の世界に向かっていく、そのような合理的な画面構成が、竹田の到達した境地です。

この背景には、竹田自身が、本当の自分の姿を周りの人にわかってほしいという思いがあったように思います。理想の君主・聖君が治める、中国の理想の時代があった、それを大切にしようということをお願いしたいわけですが、もっと違う言い方をすると、「俺のことを皆わかってくれないが、わかってくれ。馬鹿とか言わないでくれ」ということだと思えます。人を地位で見ず、心の中を見て、信じ合える理想の時代があったはずだ、と。竹田が一番嫌いなことは、地位の高いものが威張ることや、人を地位で見



ることです。また、人は地位の高い者の前ではぺこぺこしたり、人を見て態度をかえたりします。そして、世間はみな、竹田のことを「あいつは馬鹿でしょうがないやつだ」とか言う、そういう現実に対する願いと結びついていると思います。理想の世界を求める強烈な叫びを竹田の絵からは感じるのです。

●常識外れのエネルギー

——竹田は世間に馬鹿にされていたのですか。

竹田は一二・三歳のころから、耳と目が悪かった。加えて非常に疲れやすい病弱な体質でした。次男として生まれましたが、兄の没後に嫡男となり、学問をもつぱらにするように藩から命じられます。それは竹田にとっては望むところでしたが、一方で、武をもつての奉公が不能な体であると公言されたということです。世間は竹田でもやるしかない」人間と見たのです。

漢学の知識や学問の素養が岡藩で抜きんでていたことは、自他共に認めていました。豊後の地誌『豊後国志』編纂の中心的役割を担い、その最終段階の享和元年（一八〇二）五月、江戸に赴き、同国志編纂のあり方についての幕府との折衝と、最終的な校正・編集作業に一人で携っています。そうしたことによる心身の疲弊

のためでしょう、翌年五月の帰国後、竹田は四〇日以上も、国志編纂の著作局を欠勤しています。二六歳のことです。

また、同年秋、籍に入っていない、おそらくは武家の者ではない女性との間に女兒をもうけています。これは武士としては大きな非難を浴びる出来事でした。この子は病にかかりすぐに死んでしまい、女性とも離別します。このころ、竹田はノイローゼのような状態だったのではないかと思います。

そのような中、文化二年（一八〇五）三十一歳のときに、京に遊学します。このときは大坂の岡藩蔵屋敷の小屋に住み、出費を削って書物を買ひあさりまわす。髪を結う費用を浮かせ、書物代にまわすために、月代を剃らないことを藩に申し出たほどです。夕食をやめ、一日二食。朝一度に二食分炊いて新代も節約し、おかずはいつも味噌でした。さらに、書籍代として、藩に年一〇兩の借用を申し出ます。藩にとつては規則を乱す困った申し出だったでしょう。また、大坂の高名な眼科医に診てもらったところ、失明するかもしれないということで、儒学はやめて詩だけを学ぶと藩に宣言します。周囲の人にも、隠居してでも詩学を極めたいという手紙を書き送っています。こうした竹田の一連の言動を聞いて、岡の人々は竹田を「虚病」「馬鹿」「外道」と称したのです。

●一人の人間として見る

ただ、竹田が恵まれていたのは、彼の優れているところ、とうていみんなが敵わないところを理解して、親身になる人々がいた

ことです。青年期から常識に外れた言動を重ねる竹田を理解し、守り、また、度重なる旅を熱望して暇願を要求し、数々の旅に出掛けては、滞留延長の世話をするよう依頼してくる竹田をカバーし、支え続ける人々がいたのです。

また、人見知りの竹田でしたが、肝胆相照らす交わりを交わしたのが頼山陽でした。文化八年、頼山陽が大坂にいた竹田に会いに来ます。頼山陽が竹田を訪ねた理由は、正確にはわかりませんが、竹田がこの上京途中に菅茶山を訪ねていますので、菅茶山がこの男はすごいとわかって頼山陽に伝えたのだと思います。頼山陽は「半生の好友」、つまり一生の友人を得たとその場で言うわけです。竹田というのは、耳から膿がながれるし、目ははつきりしない。しかし、山陽は外見や地位でなくて、この男はすごいと見抜き、信じ合います。心の通じ合いを大切にする者たちは、会えばわかるのです。竹田はそういう人に次々恵まれるんですね。頼山陽、浦上春琴、小石元瑞、雲華、月峰、小田海仙、物集長兵衛らです。

文人画とか南画を今に伝える大切さというのは、その生き方や交流を知るところにもあると思います。そして、そういう人たちの事跡は、より正確に捉えないといけません。竹田というのは偉かった、優れた文人だったと、そういうものではありません。「文人として捉える」というのはよく言うんですが、それではばやっとしてしまいます。一人一人の人間として見るのが大切だと思います。

（二〇一一年三月一四日 於…思文閣出版）

「倭寇の会」のこと

山内晋次やまうち しんじ

今年も三月恒例の「倭寇の会」の研究合宿が近づいてきた。この研究会は、年に一度、若手・中堅の対外関係史・海域史研究者が集まる研究合宿だ。参加者のなかでもっとも人数が多いのは日本史研究者だが、何人かの東洋史研究者も毎回参加しているし、海外からの留学生もよく参加する。この「越境」性がこの会の大きな魅力だが、やや自虐的な言い方をすればこの会は、日本史・東洋史専攻のなかで、とくにマイナーな分野を研究している日蔭者・はぐれ者たちが、一年に一度集まり、メジャーな研究分野の悪口を言いつつ、自分たちの不遇をなぐさめあう会、ともいえる。

この会は、二〇〇〇年三月に始まった。そのきっかけはたしかなにかの研究会のうちに、関西の藤田明良さんや私、九州の伊藤幸司さん、東京の関周一さん・米谷均さん・橋本雄さんたちのあいだで、東西の若手が集まって対外関係史の研究合宿をやろうという話がでたことにあったはずだ。その後、やや時間が空いたが、二〇〇〇年に開催にこぎつけた。「倭寇の会」という名前は、私の記憶が正しければ、橋本雄さんの命名であったように思う（間違っていたら、すみません）。ただ、当初から、中国や韓国の研究

者と交流するにあたって、この名前はまずいのではないかという意見があり、とりあえず暫定的に使おうということになっていた。しかし結局、今にいたるまで、もとの名前のままだ。二〇〇四年の堺合宿のときに、研究報告会の会場を借りる都合上、「海上交流史フォーラム」という名前をでっちあげたが、これは定着しなかった。正直なところ私も、「倭寇の会」のほうがインパクトがあつて気に入っているし、中国・韓国などの留学生もしばしば参加するが、とくに問題はおこっていない。

今年二〇一一年までの開催場所は、以下の通り。各回の幹事は、古参・常連メンバーを中心に回している。

二〇〇〇年	室津	二〇〇六年	輓の浦
二〇〇一年	門司・下関 しもまつ	二〇〇七年	小浜
二〇〇二年	大崎下島	二〇〇八年	琴平
二〇〇三年	興津 おきつ	二〇〇九年	宇久島 うくしま
二〇〇四年	堺 さかい	二〇一〇年	篠島
二〇〇五年	能古島 のこのしま	二〇一一年	宗像

この開催地をみればわかるように、国際交流史や海上交通史と

ふかくかかわっていて、なおかつふだんあまり行く機会のない場所を選んでゐる。私個人的には、瀬戸内海の朝鮮通信使関連の港町のほとんどを、この合宿のおかげで見学することができたのが、ありがたい。

それぞれの開催地ごとに思い出はあるが、とくに印象に残っている回のひとつが、二〇〇五年の能古島だ。というのも、その年の三月二〇日、福岡で大きな地震が発生し、震源に近い博多湾入口の玄界島で大被害がでた。合宿はその六日後だった。宿泊予定の能古島の民宿にさほどの被害はなく、とりあえず開催するということで集合したが、まず能古島行フェリーの^{めいのはま}である。浜ターミナルで、地面があちこちひび割れて、建物とのあいだに大きな段差がでているのをまのあたりにした。そして、いよいよ島の民宿で合宿が始まると、しばしば真下から突き上げられる余震がきた。また、上空には、能古島の北側にある玄界島に向かう自衛隊の救援ヘリがひっきりなしに飛び交っていた。その一〇年前に阪神大震災を体験していた身としては、落ち着かない気持ちだった。さて、これまでの「倭寇の会」には、おそらく五・六〇人前後の参加者があったかと思うが、その参加者たちがこれまでに生み出した研究成果は、かなり自慢できるものだと思う。たとえば、この合宿開始以降、古参・常連メンバーを中心に刊行されたおもしろな単著として、つぎのようなものがある（副題などは省略）。

『中世日本の外交と禪宗』
『中世日朝海域史の研究』

『明代郷村の紛争と秩序』
『奈良平安期の日本とアジア』

『中世日本の国際関係』

『東アジア海域と日中交流』

『大航海時代の東アジア』

『中世対馬宗氏領国と朝鮮』

『戦国期の貨幣と経済』

『日宋貿易と「硫黄の道」』

『徽州商人と明清中国』

『琉日戦争一六〇九』

『琉球王国海上交渉史研究』

『僧侶と海商たちの東シナ海』

『商人と宣教師』

『中世日朝関係と大内氏』

このほかにも現在、さらに数人が単著を準備している。また、古参メンバーの多くが大阪大学を中心として活動する海域アジア史研究会とも密接にかかわっており、その研究会を中心に『海域アジア史研究入門』という研究入門書も刊行している。個別論文となるとおそらく、参加者全体では数百篇になるだろう。ごく小規模な研究会としては、かなりの生産力といえないだろうか。この会で培われた、「研究する倭寇」たちのネットワークは、私の貴重な財産だ。

ただ、近年の幹事の悩みは、ほかの研究会・学会と同様、参加メンバーの固定化・高齢化が進んでいることだ。マイナーな研究分野とはいえ、その研究の流れを絶やさないためにも、若手の継続的な参加がぜひとも必要だ。また、できれば、考古学や西洋史の研究者、さらには海洋学や造船工学などの理系研究者にも加わってもらい、より「越境」的な研究会になればとも思う。なにせ、われわれは「倭寇」なのだから。

（神戸女子大学准教授）

会津の民俗に学ぶ

平成二二年二月二四日から二五日にかけて、会津若松市付近では一晚に約一メートルという驚異的な降雪があった。新潟県境の国道では約三〇〇台の車が二五時間にわたり立往生し、そのニュースが全国に報道された。私は福島県の太平洋岸の雪の少ない相馬から会津に着任し、三九年目の年を迎えたが、この一瞬の間の降雪量は初めてで、雪の恐しさを痛感させられた。

南会津郡只見地方には、「丈余りの雪」という言葉があり、一丈（約三メートル）の雪は平年並であるが、一月の積雪量が五メートル以上に及ぶのは記録的である。只見町の除雪費も底を尽き、町長による除雪費の補助申請要望のニュースが全国放送で報じられた。只見町は新潟県魚沼地方に隣接する、わが国を代表する豪雪地帯である。その雪どけ水はブナ林に保水され、只見川へ注がれる豊富な水量により、わが国有数の電源地帯となっている。

私が会津へ着任した昭和四八年三月二五日は、一寸先も見えぬほどの猛吹雪の日であった。以来、自宅の除雪作業や屋根の雪下ろし、吹雪の中での運転、雪中の民俗調査など雪との戦いが年中行事のようにやって来た。しかし今思えば、これが民俗学を学ぶ

私にとっては、会津の自然と人々との生活、すなわち「会津の民俗」そのものであったといえる。四〇年という歳月をかけて、私はそれを身体で体験し、学んできたことになる。軒先まで雪のある民家を訪問し、暖かく迎え入れられた瞬間、吹雪の苦勞を忘れる思いである。

会津の民俗は、一口に言うところ「雪の民俗」といっても過言でない。「会津の三泣き」というたとえがある。これは雪のない土地から会津へ赴任するときに、よく言われる。雪国会津へ行きたくないと一回泣く、会津へ来てみると、会津人の厚い人情に二回泣かされる。そして会津人と別れることで、三回泣かされる。これは会津の民俗を簡潔に表現したたとえであり、私はよく会津の民俗を説明する時に紹介している。私は二回泣いている。三泣きをせずに、会津人になりたいと願っている。

このような自然環境のもと、会津の人々は雪と戦い、そして雪の恵みを農業に生かしてきている。会津の自然に即した農業の方法を記述したのが、若松城下に近い幕内村の肝煎（庄屋）佐瀬与次右衛門の『会津農書』である。同書は貞享元年（一六八四）に

佐々木 長生

著者と次右衛門の体験と「郷談」と呼ばれる旧慣習をもとに著述されたものである。わが国の農書の代表とされる宮崎安貞の『農業全書』（元禄一〇年＝一六九七）より一三年も早く世に出されており、古典的価値を有する。

また当時自立したばかりの農民（本百姓）にわかりやすく覚えやすいようにと、与次右衛門は宝永元年（一七〇四）に和歌でつづった『会津歌農書』を著述した。さらに、当時の農業に関する言葉や農耕儀礼などを、対話形式で収録した『会津農書附録』をも著している。これらには農業技術はもとより、田の神信仰や衣・食・住、田植え歌や田植え踊りなどの民俗芸能など、近世の会津の民俗について詳しく記載されている。その中には、古くからの言い伝えや古歌という形で、中世にまで遡りうる民俗の記載まで見られる。

『会津農書』の原本は未発見であるが、寛延元年（一七四八）の写には、一〇〇点余りの農具の解説がある。その中に唐箕からこの使用があり、これはわが国最古の記録である。私が『会津農書』に出会ったのは、昭和五四年に「半唐箕」と呼ばれる原初的な唐箕の調査報告をしたときであった。以後、同書記載の農具を中心に、農業技術・農耕儀礼・田植え歌および田植え踊りなど、『会津農書』の民俗学的研究を三〇年余り続けて今日に至っている。

民俗学は、民間伝承を資料として研究するため、歴史性に欠けるという批判をよく耳にしてきた。そこで私は、貞享元年の『会津農書』を基軸に、近世の文献史料と絵画資料とを照合すること

を考えた。また、民具に墨書された年号をはじめとする紀年銘民具に注目してきた。

会津地方では寛文五年（一六六五）の風俗帳の書上げをもとに、翌年に『会津風土記』が会津藩によって編纂されている。ついで貞享二年、文化四年（一七〇七）の風俗帳の書上げを行い、文化六年には『新編会津風土記』が編纂され、その内容は会津藩領および南山御蔵入領の会津全域に及んでいる。風俗帳には、衣食住、生産生業、通過儀礼、口頭伝承、寺社縁起など民俗全般に関わる記述が見られる。また寛文・貞享・文化年間という各時代に著述されていることから、民俗の変遷をも読みとることができる。

『会津農書』と風土記・風俗帳等の文献、民間伝承、そして民具という三位一体の資料から、会津の民俗を検討・考察するのが、近年の私の研究方法である。このような方法において、民間伝承では消滅した民俗が文献史料から確認される場合がある。例えば『会津農書』には焼畑耕作として、「火耕」または「かこう」という記述があり、寛文六年の『会津風土記』にも見る事ができるが、現在では聞かれない農語となってしまった。詳細については今秋刊行の共著を参照されたい。

会津には他地方では見られなくなった農具や民具、民俗芸能などが今日まで継承されている。周囲を山に囲まれた地形や豪雪などが、その民俗性に関わっているのだからうか。引き続き会津の民俗に学びながら、その要因を考えていきたい。

（福島県立博物館専門員）

ロシアにおける日本史の研究

シャバリナ マリア

わたしは、モスクワ大学を二〇〇六年に卒業後、京都大学で日本古代史を勉強している。今回は、ロシアにおける日本史の研究状況を紹介したいと思う。

モスクワ大学は一七五五年にエリザベータ皇帝の詔勅で設立された。当時のヨーロッパ諸国と同レベルでの高等教育をめざして、以来、ロシアでは特別な位置を占めている。日本の研究が行われているアジア・アフリカ諸国大学（名称は「大学」だがモスクワ大学に所属する学部）は一九五六年創設とモスクワ大学の諸学部の中では比較的歴史は短いのだが、日本語をはじめとして、日本経済・日本政治学・日本文学・日本史の多くの専門家を毎年世に送り出している。

そもそも、ロシアで本格的な日本の研究が始まる十九世紀後半・二十世紀の初め頃には日本学科はおかれず、東洋学部として存在していたので、日本の研究をしていた学生たちは、中国語・ハンゲルとともに日本語の勉強に励み、仏教・比較言語学・東洋史といった幅の広い基礎研究に取り組んでいた。

やがて二十世紀後半に入ってから日本語学科をはじめとした日本に関する諸学間が東洋学部から独立し、結果として日本語を中心とする言語学が研究の中心を占めるようになった。特に旧ソ連時代は日本の社会制度史・マルクス主義歴史学が盛んになり、法令国家や武士社会について多くの研究が発表された。また日本の図書館・大学との交流も活発になり、論文・研究がロシア語に訳され、日本史を専攻とする研究者以外にも日本史への関心が高まることとなった。また同時期に、翻訳家や研究者らによって『古事記』・『日本書紀』をはじめとして『源氏物語』や『枕草子』といった文学作品も翻訳されたことで、日本史を研究するための環境が整った。

現在でも、日本語は中国語やアラビア語と並んで受験生のなかでも最も人気が高い学科の一つであるが、その要因として、ロシアでも日本の漫画・アニメなどが流行っており、文化的影响を強く受けている若者がロシアで多く見受けられることがあげられる。彼らのなかには幼い頃から英語よりも日本語に親しみを覚える人もいて、趣味や独学で日本語を勉強するロシア人も多くなった。

しかし、日本語は母語のロシア語や諸ヨーロッパ語と文法・文字などが根本的に違う言語であるため、自由に話せるようになるまで独学で覚えるのは難しく、基礎から日本語教育を受けられる場所は大学においてほかにないのが現状である。それゆえ、大学での日本語教育は非常に人気が高くなっているようである。

なお、大学での教育期間は四年間であるが、在学中に常用漢字をすべて覚え、一般書を読めてニュースが理解できるほどの日本語を身につけ、日本語を使用する仕事に就職できるようになるための授業や演習が多様に準備されている。

しかし、日本史の研究者の道を選びたいと思うと、必然的に困難が生じてくる。一つ目の理由として、八〇年代・九〇年代と比べると、大学・大学院での教育が徐々に翻訳家養成へと転換されたとえば日本史研究に必要な漢文・史料読解やくずし字の授業は旧ソ連時代に大学院のカリキュラムに入っていたが、今は受講者の減少のため削減されていることがある。二つ目の理由は、旧ソ連時代が終わって以来、大学財政制度が大きく変わったことである。図書館への日本史の史料・論文の新着は大幅に削られており、日本史の研究のための『大日本史料』や『大日本古記録』などの基礎的な史料は書庫に揃っているが、それ以外の新しい論文や研究書は個人で日本から取り寄せるしかなく、若手の研究者にとって大きな障壁となっている。

現在、ロシアのなかで日本史は非常に人気が高く、毎年全国の研究者を集める学会や研究会が開かれているにもかかわらず、上

記の理由によって若手研究者の数は少なく、ロシアにおける日本史学は一つの転換期を迎えているといえよう。

大学・大学院における教育のバランスをどのようにとるのか、若手の研究者をどのように育成するのかは、ロシアにおける日本史学の最も重要な課題となっている。国の対策も重要であるが、現在の教育制度の短所をおおいに補うのは留学制度である。モスクワ大学は五つの日本の大学と一年間の交換留学生の契約を結んでおり、毎年二〇人ほど（ほぼ全員）の学生がこの制度を利用している。日本の大学では、留学生むけの科目が充実しているため、日本語の上達や日本文化の勉強にとっては絶好の機会といえる。もともとその時に大学の一般の授業を聴講することもゆるされるので、将来の道を決めるのに一番いい時期であると思う。

その時に日本古代史の授業を聴講しようと思うとやはりすぐに言葉の壁にぶつかってしまうが、筆者自身、はじめて大学の書庫を見学したり、大学の授業で一、二割ほどの内容を理解できたり、日本古代史の専門書を読み切った時の喜びや刺激は未だに忘れられず、日本史の研究者の道に踏み切る決心を与えてくれた重要なきっかけであった。先述のように現在のロシアでは、大学での教育方針を翻訳家養成へと転換することは研究者養成を犠牲にする危険性を孕んでいるが、留学制度こそがその問題の解決を導くのではなからうか。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

史料

探訪

44

豊蔵坊孝雄筆「田中宗清石清水八幡宮立願文案写」

川 燭 薫
かわ ばた かおる

(八幡市立松花堂庭園・松花堂美術館 学芸員)

八幡市立松花堂美術館は、松花堂昭乗（一五八二〜一六三九）とゆかりの作品を主な収蔵品として平成十四年に開館した。春の企画展、秋の特別展など年間約五回の展覧会を行なっている。また平成二十一年秋には松花堂昭乗研究所を発足させ、公募による市民研究生とともに、松花堂昭乗研究の全国発信を目指した活動も行なっている。

松花堂昭乗は、江戸時代初期に男山（京都府八幡市）にある石清水八幡宮の瀧本坊に住した社僧である。初め鐘楼坊に住し、のち瀧本坊の住持となった。瀧本坊では親友の小堀遠州と語り、坊の東斜面に掛け造りの茶室「閑雲軒」を建築している。晩年は坊を後嗣で甥の乗淳に譲り、自らは坊の南に二畳ばかりの草庵「松花堂」を建て、隠棲した。当館には、約六千坪の日本庭園（松花堂庭園）が併設されるが、園内には草庵松花堂（京都府指定文化財）が移築されており、往時の姿を偲ぶことができる。かつて男山の中腹にあった草庵は、明治政府による廃仏毀釈の折に取り払われたが、その後の変遷を経て現在に至ったのである。

松花堂昭乗の名は現在、四つ切の箱に料理を詰めた「松花堂弁

当」として名を留めるが、江戸時代にあつては、茶の湯、書画、和歌など諸芸に通じ、「松花堂スタイル」ともいふべきスタイルを呈した江戸時代初期を代表する芸術家であった。茶の湯の世界においては、名物茶道具「八幡名物」ゆかりの人物であり、書においては、「寛永の三筆」に称される能書家であり、その書は松花堂流（瀧本流）として、彼を慕う人々によって長く継承された。

江戸時代の男山は、華やかな文化的交流の拠点であった。その中で、松花堂昭乗の存在は光彩を放つ。昭乗のまわりには多彩な人々が集い、その書を慕う多くの門人が輩出された。ここに紹介する豊蔵坊孝雄もまた、そのひとりである。

豊蔵坊孝雄（一六二六〜一六八八）は男山豊蔵坊の社僧で、信海、玉雲翁、牛庵などと号した。狂歌作者として著名であるが、書は昭乗に学んだことが窺われ、その風をよく継承している。近年、当館にて寄託を受けた作品に、孝雄の筆になる興味深い書巻（二巻）がある。本紙は金銀泥絵下絵を施した料紙十七枚を継いだもので、巻頭「敬白 立願事」に始まり、十三の箇条書きが続く。本文はいわゆる「定家様」で書されており、最後の条は「貞



「田中宗清石清水八幡宮立願文案写」
(巻頭部分／個人蔵・八幡市立松花堂美術館寄託)

應二年十月日 法印大和尚位」と結ばれ、その後には本文と同筆で「右一記應人之需 楚忽染毫畢 貞享三歲十一月日 雄徳山住侶比丘孝雄（花押）」と記される。

本巻表紙の題籤には「一」百拾番 信海巻物」とあり、見返し右端には「瀧本七種ノ内 定家卿写 豊藏坊信海筆」と記された題籤がある。また、共箱が付属し、蓋表には「定家卿記録 信海筆」と墨書され、蓋内側には「瀧本坊七種名器之壹品 黄門定家卿八幡宮立願之記録 但シ本紙奥書近衛信尹公也」とある。そして箱身底裏に「黄門定家卿願文 信海写之」と墨書される。以上の内容から、本巻は貞応二年（一二二三）に成った「法印大和尚位」の願文を、孝雄が貞享三年（一六八六）に書写したものであることがわかる。

この元となった願文は「法印宗清石清水八幡宮立願文案」（天理大学附属天理図書館蔵）として知られるもので、藤原定家が貞応二年十月、法印大和尚位にあった田中宗清の依頼によって、漢文体の願文案を漢字仮名交じり文に書き改めたものである。その書き様には定家独特の書風（定家様）が認められる。

また、巻末には「時之権別当法印立願之事、雑假名所望之處、京極中納言定家卿承引之趣、不可思議之一軸也、是則可為雄徳山奇珍之其一者乎 慶長十五仲冬日（花押）」と極書が付される。これは花押から近衛信尹によるものと知られる。そして、定家筆になる立願文は慶長十五年（一六〇〇）において、雄徳山（男山）にあったことがわかる。

ここで、男山に伝わる定家の書跡といえ、瀧本坊の什物目録の記載品が連想されよう。「大願文」、「小願文」と称される掛幅をはじめ、茶会記にも登場する「縁起」のほか、いくつかの記載がみられるが、この立願文に該当するものは見当たらない。ただ、極書にみえる「雄徳山奇珍」という語からは「八幡名物」（瀧本坊に代々伝来した名物茶道具に対する呼称）も想起される。孝雄の筆になる一巻の付属箱書にみえる「瀧本坊七種名器之沓品 黄門定家卿八幡宮立願之記録」という一文も考慮するなら、定家筆の願文が瀧本坊に伝来した可能性もないとは言いつれないだろう。

さて、定家自筆の立願文と、孝雄筆のそれを比較すると、用字や行移りもほぼ完全に書き写されていることが知られて興味深い。しかし、巻末に付された極書は写さず、定家筆の本文のみを写している。その代わりに、巻末には「孝雄」の署名で款記が付される。孝雄の書作には「信海」の号なども用いられるが、あえて法諱の「孝雄」を用いた背景には、本巻に対する自負があったのかもしれない。この書巻を成した貞享三年、孝雄は還暦を迎えている。ちょうどその年と思われる「六十になりし春」と題した狂歌がある。

手習の道にかなへと我ことし筆試る六十のはる

〔塩村耕「八幡拾遺」と『鳩の杖』（相山女学園大学研究論集）第十七号、一九八六年〕所収の柿衛文庫所蔵「八幡拾遺」翻刻を引用）

六十にして初心に戻る謙虚さを詠んだものであるが、孝雄の書

に対峙する思いが感じられよう。彼の作品には定家様で書かれたものも散見する。孝雄の定家様は、男山に伝わった立願文という手本の存在によって裏付けられるものであったといえよう。本巻は、その習熟を窺わせる貴重な作品といえる。

最後に、全く同一の内容をもつ豊藏坊孝雄による卷子本がいまひとつ存在する。それは、石清水八幡宮に蔵される一巻で、料紙を除けば、紙継ぎおよび紙面構成等において一致している。両者は期を同じくして作成されたものと考えられる。

これらふたつの「田中宗清石清水八幡宮立願文案写」は、春季展「御鎮座一一五〇年 石清水八幡宮展」にて展示中である。今回初公開となるふたつの作品をぜひご覧頂きたい。

— MEMO —

八幡市立松花堂庭園・松花堂美術館

京都府八幡市八幡女郎花43 Tel.075-198110010
ホームページ <http://www.yamatobunko.jp>

・京阪電車「八幡市駅」または「樟葉駅」から京阪バスに乗車（約10分）「大芝・松花堂前」停留所下車すぐ。

・入館料 一般400円 高大生320円 小中生200円（企画展、特別展の場合は別料金、庭園に入園するには別途400円が必要です）

・開館時間 午前9時～午後5時

・毎週月曜日（祝日の場合は翌平日）および年末年始休園・休館

〔開催〕（春季展）2011年5月8日（日）

〔御鎮座一一五〇年記念〕石清水八幡宮展

※円山応挙筆「松鳩図絵馬」（石清水八幡宮蔵）、「八幡大菩薩 篝火御影」（神應寺蔵）、「松花堂昭乗昭乗印契」（重要文化財、石清水八幡宮蔵）など約40点を展示

書評・紹介一覧 12～3月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
伏見学ことはじめ (紹)京都新聞 12/11(松岡正剛)	太子信仰と天神信仰 (紹)日本史研究 第581号(芳澤元)	
日記が開く歴史の扉 (紹)京都新聞 2/1(松岡正剛)	一休派の結集と史的展開の研究 (記)長崎新聞 12/1	
青島の都市形成史：1987-1945 (評)歴史と経済 第210号(浅田進史)	(記)岐阜新聞 12/3	
九州の蘭学 (紹)日本醫學史雑誌 第56巻第4号(原敬二郎)	歴史のなかの天皇陵 (記)京都新聞 12/16(芦田恭彦)	
文人世界の光芒と古都奈良 (紹)ヒストリア 第223号(幡鎌一弘)	(紹)京都民報 2/27(後藤真)	
近世長崎司法制度の研究 (紹)史学雑誌 第119編第12号(木村直樹)	(紹)しんぶん赤旗 3/6	
武士と騎士 (紹)日本歴史 第753号(関幸彦)	広瀬旭莊全集 詩文篇 (紹)大分合同新聞 1/13	
	天翔ける白鷗 (紹)週刊仏教タイムス 12/2	
	(記)中国新聞 2/21(伊藤雅之)	

12月から3月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
近世の環境と開発	根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編	1544-7 C3021	7,875	12
シーボルトが蒐集したシタ標本	加藤億重著	1550-8 C3045	7,350	12
高句麗壁画古墳と東アジア	門田誠一著	1546-1 C3022	9,030	1
William Smith Clark の教育思想の研究	小枝弘和著	1561-4 C3037	3,150	2
近世琵琶湖水運の研究	杉江進著	1551-5 C3021	9,450	2
歴史のなかの天皇陵(2刷)	高木博志・山田邦和編	1514-0 C1021	2,625	2
日本文学の「女性性」	増田裕美子・佐伯順子編	1549-2 C3091	2,415	2
いけばなにみる日本文化	鈴木榮子著	1557-7 C1076	2,730	2
仁明朝史の研究	角田文衛監修・古代学協会編	1547-8 C3021	7,350	2
戦国大名武田氏の権力構造	丸島和洋著	1553-9 C3021	8,925	2
日本古代典籍史料の研究	鹿内浩胤著	1552-2 C3021	7,035	3
松花堂昭乗と瀧本流の展開	山口恭子著	1559-1 C3091	9,030	3
地域開発と村落景観の歴史的展開	原田信男編	1555-3 C3021	9,450	3
近世京焼の研究	岡佳子著	1558-4 C3072	6,615	3
藤村庸軒をめぐる人々	白壽顕成著	1554-6 C3021	17,325	3

12月から3月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
佛教大学研究叢書	5	12	中国五代国家論	1545-4 C3022	6,825	12
住友史料叢書	25	25	年々諸用留十番	1548-5 C3321	9,975	12
増補・改訂 西村茂樹全集	10	11	論説2 訳述書6他	1556-0 C3312	18,900	3

(表示価格は税5%込)

▼このたびの東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。出版業界も大きな影響を受けておりますが、価値ある書籍を変わず刊行し、より多くの方々にお届けすることで、ささやかながら復興のお手伝いをしていきたいと存じます。

☆フェア情報

ジュンク堂書店新宿店（東京都新宿区）

歴史書懇話会フェア

「廃藩置県〜大正デモクラシーの時代」

4月30日まで

☆学会出店情報

小社刊行圖書を展示販売
※出店日は変更の可能性有

美術史学会（同志社大学京田辺キャンパス）

5/20（金）〜22（日）

歴史学研究会（青山学院大学）

5/21（土）〜22（日）

法制史学会（立命館大学衣笠キャンパス）

6/4（土）〜5（日）

芸能史研究会（同志社女子大学）

6/5（日）

茶の湯文化学会（明治大学）

6/11（土）

日本医史学会総会（順天堂大学）

6/11（土）〜12（日）

日本近世文学会（日本大学）

6/12（日）

▼文人画というところ、何やらかび臭い、すました絵というイメージを正直持っていました。今回宗像先生のお話を聞き、作業中のゲラを使つて、竹田の絵を解説していただくことで、イメージが一新されました。エネルギーあふれる、強烈な個性に圧倒されました。（h）

▼今の時期小社近辺は新入生で賑わい、初々しい顔に新しい季節を実感します。そんな百万遍ともこの春でお別れ。長く親しんだ場所を離れるのは寂しいかぎりですが、移転後もどうぞよろしくお願いいたします。（須）

▼関西の春は、東大寺のお水取りが呼ぶと言われませんが、吾々編集にとつての春は、3月、科研関係の仕事が山場を越えれば、と言えます。この春もたくさん本が羽ばたきます。春の訪れと合わせて、お楽しみを。（大）

▼歴史学研究会の大会に合わせて新刊を準備しています。著者・執筆者のみなさん、大会に本を並べられるようがんばりましょう！

お前ががんばれと怒られそうですが：（M）

▼この時期の電話に社内は、合格通知を待つ保護者（むしろ受験者？）のようです。何の探沢か？今年度の新刊をお楽しみに。（江）

▼表紙図版・交趾写二彩寿字文大花生（和歌山県立博物館所蔵）／『近世京焼の研究』より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回（3・6・9・12月）刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.81

2011（平成23）年4月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

仁明朝史の研究

仁みょうちよう
承和転換期とその周辺

角田文衛監修／財団法人古代學協會編

仁明天皇（在位八三三〜八五八）の時代は、平安京が安定するとともに「初期摂関政治」が姿を現し、和歌、楽舞、仏教儀式などが新たな装いを見せ、「国風文化」への地均しが行われた時代であった。文献史学・考古学・美術史など各分野から気鋭の研究者を集結し、仁明朝の歴史的意義を多角的に解き明かし、日本国内のみならず東アジア世界の動向とも関連づける。

第一部

九世紀東部ユーラシア世界の変貌 山内晋次（神戸女子大学准教授）

―日本遣唐使関係史料を中心に―

九世紀の調庸制―課丁数の変化と偏差―

「化他」の時代

―天長・承和期の社会政策と仏教―

平安京野寺（常住寺）の諸問題

第二部

銭貨と土器からみた仁明朝 高橋照彦（大阪大学准教授）

造瓦体制の変革期としての仁明朝 網伸也（京都市埋蔵文財研究所）

定額寺の修理と地域社会の変動 菱田哲郎（京都府立大学教授）

承和期の乾漆併用木彫像とその後の展開 根立研介（京都大学教授）

平安時代前期の陵墓選地 山田邦和（同志社女子大学教授）

斎宮・離宮院変遷の歴史的背景 山中章（三重大学教授）

―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢神宮―

▼A5判・三五〇頁／定価七、三五〇円

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

各時代に陵墓がどうあり、社会のなかでどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会も収録。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

後鳥羽院政の展開と儀礼

谷昇著

後鳥羽天皇の政治課題と政策理念が、公事と宗教儀礼の中に具現しているとする視点から、それらが果たした政治的役割を個別具体的に検証することにより、多面的な視点に立った後鳥羽理解、政治史叙述を企図する。

▼A5判・三二八頁／定価六、三〇〇円

高句麗壁画古墳と東アジア

門田誠一著

高句麗壁画に描かれた図像や題材のなかで、もつとも重要な対象である墓主像に焦点をあて、文献や金石文と照らし合わせながら体系的に考察する。古代のみならず東アジアの歴史的時空の再構築をめざす労作。

▼A5判・四四八頁／定価九、〇三〇円

中国五代国家論

佛教大学研究叢書⑫

山崎覚士著

五代十国時代における「中国」と諸国間との支配関係を考察し、「中国」の権力構造に含み込まれつつも海上に新たな国際秩序を構築しようとした呉越国に焦点をあて、国家の構造を明らかにする意欲作。

▼A5判・三六二頁／定価六、八二五円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式(全五巻)

第一回配本(一) 巻一・二・四・六・七甲・七乙
〔5月刊行予定〕

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号・項目頭注を付し、各巻末に項目索引を収載した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を二頁でみる事ができるようにトリミングを工夫した

続刊 ▼平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

(一) 巻八・十一

平成三年 七月刊行

(二) 巻十二・十三・十五・十六・二十・二十二

平成三年 九月刊行

(四) 巻二十六・三十一

平成三年 二月刊行

(五) 巻三十二・三十六・三十八・三十九・四十二

平成四年 三月刊行

東京国立博物館古典籍叢刊
続刊予定

編集委員
島谷弘幸(編集委員長・東京国立博物館)
高橋裕次(東京国立博物館)
田良島哲(東京国立博物館)
富坂賢(東京国立博物館)
田島公(東京大学史料編纂所)
月本雅幸(東京大学人文・社会系研究科)
吉岡真之(東京大学史料編纂所)

国宝 元暦校本万葉集
国宝 元永本古今和歌集
国宝 寛平御時后宮歌合
国宝 三宝絵詞
国宝 群書治要

日本古代典籍史料の研究

【最新刊】

鹿内浩胤著

史書・法制史料・儀式書・部類記など歴史学の土台をなす日本古代史の基本史料を対象に、原撰本へ如何にして接近するか、伝来論的アプローチを中心に「文献学的研究」と「書誌学的研究」の二部構成で研究の方法論を提示する。

前編 文献学的研究

第一章 『続日本後紀』現行本文の成立過程

第二章 『弘仁式』篇目考

第三章 田中教忠旧蔵『寛平二年三月記』について

後編 書誌学的研究

第一章 九条家本『延喜式』の書写年代

第二章 東山御文庫十一冊本『類聚三代格』について

第三章 伏見宮家本『東宮御元服部類記』について

しかない・ひろたね：一九六二年青森市生。現在、宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室主任研究官。
▼A5判・三七六頁／定価七、〇三五円

安祥寺資財帳

京都大学史料叢書一七

京都大学文学部日本史研究室編

鎌田元一・中町美香子編集・解説

巻首から巻尾まで備わった、貴重な資財帳史料の一つ、安祥寺資財帳。現存の諸本の祖にあたる京都大学蔵本(旧観智院蔵本)を影印収録、釈文と解説を付す。
▼A5判・一七六頁／定価五、七七五円

御堂関白記全註釈

〔第2期・全8冊〕

山中裕編

本全註釈は永年にわたる講読会(東京・京都)と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。

【全巻完結】

▼A5判・総二〇三〇頁／定価(揃)五三、〇二五円

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会編

〔5月刊行予定〕

日本の古文書を代表する史料群であり、中世の基本史料である東寺文書。本書は、東寺文書に魅せられた中世史研究者により、一九九四年以降続けられた東寺文書研究会での研究成果の第2弾。研究会の報告を基礎に最新の成果を披露した19篇。

《Ⅰ 東寺の僧侶、その職位とはたらき》

永久元年の真言宗阿闍梨と東寺定額僧

真木隆行（山口大学准教授）

年行事と案文

宮崎肇（早稲田大学非常勤講師）
岡本隆明（京都府立総合資料館）

《Ⅱ 莊園、そして莊園史料からの発展》

土地範疇と地頭領主権
地下請小考

保立道久（東京大学史料編纂所教授）
志賀節子（関西大学非常勤講師）

東寺領近江三村庄とその代官

村井祐樹（東京大学史料編纂所助教）
高橋傑（慶應義塾普通部教諭）

周防国美和莊兼行方の年貢収取について

清水克行（明治大学准教授）

新見莊祐清殺害事件の真相

清水克行（明治大学准教授）

備中国新見莊における代官新見国経期の公用京進と商人の活動

辰田芳雄（岡山県立朝日高校教諭）

室町期東寺の寺院運営に関わる夫役と膝下所領

西尾知巳（日本學術振興會特別研究員）
西谷正浩（福岡大学教授）

中世後期における村の惣中と庄屋・政所

大山喬平（京都大学名誉教授）

《Ⅲ 權力の裁許、政治勢力の地域的展開》

六波羅探題における「内問答」と「言口法師」

酒井紀美（茨城大学教授）

親応の擾乱以降の下文施行システム

龜田俊和（京都大学非常勤講師）

室町期越中国・備前国の莊郷と領主

山田徹（京都大学助教）

戦国期西播磨における地域権力の展開

渡邊大門（大阪観光大学客員研究員）

《Ⅳ 史料の性格の読解》

東寺宝蔵の文書の伝来と現状
「東寺長者補任」の類型とその性格
「延文四年記」記主考

新見康子（東寺宝物館）
高橋敏子（東京大学史料編纂所准教授）
山家浩樹（東京大学史料編纂所教授）

東寺百合文書

既刊8冊

京都府立総合資料館編

〔年1回刊行〕

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（平成九年国宝に指定）。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

▼A5判・平均四五〇頁／定価（各）九、九七五円

東寺・東寺文書の研究

上島有著

〔第21回角川源義賞受賞〕

近世文書や聖教類も含めた東寺文書の整理の歴史を、東寺と東寺文書の研究に永年携わってきた著者が、寺史や伝来とも関わらせて集大成する。

▼A5判・八七二頁／定価一七、八五〇円

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。本来の保管形態を復元し、伝来を確定して位置付けをしなす。カラー口絵4頁・本文挿入図版80点。

▼A5判・六三四頁／定価一二、六〇〇円

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

貴人と牛車ですれ違う場合の正しい作法は？ 参内するときはどこで牛車を降りればよいのか？ 中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

【最新刊】

京都嵯峨の名刹・天龍寺の古文書は、仏教史・寺院史のみならず多数の朝廷・幕府発給の文書、荘園関係文書を含み、政治史・社会経済史研究に必須の文書群である。鎌倉時代・慶長5年の中世天龍寺関係文書および関連諸塔頭文書を翻刻、研究編として解説・論考を収録。重書案の骨子目録を付す。

● 内容目次 ●

第一部 文書編

天龍寺文書

(天龍寺・臨川寺・宝篋院文書)

鎌倉・南北朝時代 三〇〇通

室町時代 二六五通

戦国時代 八二通

織豊時代 一五二通

付録 関連書塔頭文書

寿寧院文書 五通

某院(寿寧院)文書 五通

真乘院文書 二三通

慈濟院文書 五通

妙智院文書 一通

第二部 研究編

天龍寺文書の構成と内容

(原田正俊・関西大学教授)

天龍寺・臨川寺・善入寺の所領について

(地主智彦・文化庁美術学芸課文化財調査官)

天龍寺・臨川の寺辺・近傍所領

(玉城玲子・向日市文化資料館学芸員)

世良親王遺領と臨川寺の創建

(中井裕子・関西大学大学院博士後期課程)

天龍寺塔頭寿寧院の文書と所領

(傍野一裕・尼崎市教育委員会学芸員)

戦国・織豊期の天龍寺諸塔頭について

(伊藤真昭・善隆寺住職・大谷大学非常勤講師)

重書案文の骨子目録

▼A5判・七二〇頁／定価一四、七〇〇円

鹿王院文書の研究

鹿王院文書研究会編

足利義満を開基・春屋妙葩を開山とする臨済宗寺院の鹿王院所蔵の中世文書約九〇〇点を収録。あわせて解題・研究篇を付す。

▼A5判・五三〇頁／定価一三、六五〇円

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

【第六回全国大学国語国文学会賞受賞】

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明することで、中世末期の寺院研究史上の欠如を埋める。一休の印可・法嗣否定による法統断絶の危機、大徳寺復興や在俗信仰者の結衆の問題などを扱う。

▼A5判・三七〇頁／定価八、一九〇円

関山慧玄と初期妙心寺

加藤正俊著

世縁の粘着を嫌い隠逸の生涯を送った妙心寺の開山・関山慧玄は、自らの意志で伝記の手掛かりとなるものは遺さなかった。後世の関山伝や印可状などの諸史料を精密に分析し、初期妙心寺における関山を中心とした諸問題にとりくみ、宗門の密室性に分け入った一書。

▼A5判・三九〇頁／定価六、八二五円

江月宗玩 欠伸稿訳注 乾・坤

芳澤勝弘編著

江月宗玩の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。私的なものも多く、江月の人柄を示すとともに多くの文化人との交流を記録しており、当時の文化人の消息を窺う貴重資料。

▼A5判／定価(各)九、九七五円

相国寺蔵 西笑和尚文案

自慶長二年至慶長十二年

伊藤真昭・上田純一・原田正俊・秋宗康子編

豊臣秀吉・徳川家康のブレインとして、寺社政策・外交政策に辣腕を発揮した相国寺中興の祖・西笑承兌の発給した書状の文案をまとめた『西笑和尚文案』全一〇冊を、紙背文書も含め初めて活字化。

▼A5判・三九六頁／定価七、三五〇円

地域開発と村落景観の

歴史的展開

原田信男 国士館大学教授編

多摩川中流域を中心に

関東平野西部の多摩川中流域をフィールドに、開発と景観という観点から、地球環境の変遷を問ひ人間の営みの歴史をたどる。豊富な考古遺跡・遺物にくわえ、村絵図・地方文書などの文献史料を手がかりとし、旧石器時代から前近代にわたって通史的に論じる。20年におよぶ年月をかけ行われた共同研究の成果。

日野・八王子地域とその周辺の地形

第部

先史・古代の通史的展望
先史時代における日野・八王子地区の開発と景観
古代における集落と谷戸の開発

古代における沖積地の開発と景観
——八王子石川天野遺跡の事例から——
——日野市南広間地遺跡を例として——

第二部

中世・近世の通史的展望
中世・近世における丘陵部の開発と景観
——八王子市宇津木台遺跡群を中心に——

中世・近世における沖積地の開発と景観
——船木田荘と多西郡三郷——

近世中・後期における低地部の開発と景観
近世中・後期における台地部新田開発の様相

第三部

近世における開発と景観の諸相
近世における丘陵部の開発と村落景観
——石川村の天正検地とその後——

近世における丘陵部の村落景観と親族・生活相互扶助組織
近世の日野・八王子地域における耕地開発と宗教施設
近世の日野・八王子地域における焼畑の位置

久保純子

原田信男
上敷領久

有村由美

有村由美

原田信男

梶原 勝

原田信男

清水裕介

井上 潤

原田信男

酒井麻子

飯泉今日子

山本智代

【最新刊】

▼A5判・四八六頁／定価九、四五〇円

中近世農業史の再解釈

伏見元嘉 郷土史研究家・伊予史談会所屬著 『清良記』の研究

戦国末期伊予の軍記『清良記』全30巻を分析。その著者および成立年代を確定し、日本最古の農書とされる第7巻「親民鑑月集」の位置づけを明かす。近世農業の始まりとしての農書という定説をくつがえし、中世農業の最終段階をはじめて詳説したと位置づけ直す。

【5月刊行予定】

▼A5判・四一六頁／定価八、一九〇円

近世の環境と開発

根岸茂夫・大友一雄・佐藤孝之・末岡照啓編

江戸時代の現実に沿って、村落・河川・山野・鉱山を題材に、環境と開発の問題について改めて問ひ直す論文集。各執筆者が研究発表と討論を重ねた研究会の成果。

▼A5判・三六六頁／定価七、八七五円

中世村落の景観と生活

思文閣史学叢書

原田信男著

現地調査にもとづき、地形や伝承、中世・近世文書や地誌類などの豊富な資料、さらに地理学・考古学などの隣接諸科学も援用して、典型的な中世村落の事例復元を試みる。

▼A5判・六四〇頁／定価一一、三四〇円

関東平野東部を中心として

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著

第1章 戦国期権力佐竹氏の成立過程

佐竹義舜の太田城復帰と「佐竹の乱」
永正期における佐竹氏の下野出兵
佐竹氏の小田進出と越相同盟

第2章 佐竹氏の権力構造と三家の活動

佐竹氏の南奥支配と東家義久の活動
北家義斯の活動
三家の政治的位置

第3章 佐竹氏権力の地域編成

佐竹氏領国内編成の地域的偏差
佐竹氏の陸奥・南郷経営
佐竹氏の南奥進出と船尾氏の存在形態

ささき・みちろう：一九六六年静岡県生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退、博士（文学）。大正大学文学部准教授。
【最新刊】

▼A5判・三〇〇頁／定価六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

戦国大名はどのような伝達ルートを通じて家中の内外との意思の疎通を行ったのか？本書は甲斐武田氏を分析対象とし、家中を代表して他大名との外交を担った「取次」に着目。領国支配における意思伝達経路の検討とあわせて、大名権力の中核を構成する家臣や、大名と家臣の関係について見つめ直し、戦国大名の権力構造を明らかにする。

▼A5判・四三六頁／定価八、九二五円

戦国期関東公方の研究

阿部能久著

思文閣史学叢書
関東府の長である関東公方権力の戦国期から江戸期初頭にかけての諸問題の解明に取り組む。公方発給文書の様式変化にみる権力構造の実態、鶴岡八幡宮・鎌阿寺や禅宗・一向宗などの寺社勢力との関係、関東公方家の後裔である喜連川家の幕藩体制下の位置、さらに武家故実書『鎌倉年中行事』の成立背景を探る。

【内容】戦国期関東公方とその発給文書／『鎌倉年中行事』と関東公方／関東公方と寺院勢力／喜連川家の誕生
▼A5判・三二〇頁／定価五、九八五円

室町期東国社会と寺社造営

小森正明著

思文閣史学叢書
鎌倉府体制下にあった室町期の東国社会に、寺社造営事業と寺社領経済が与えた影響を考察する。「香取文書」など中世東国の「売券」の長年にわたる分析に基づく成果。
▼A5判・二五六頁／定価七、三五〇円

京都の都市共同体と権力

仁木宏著

思文閣史学叢書
中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなかから町（ちよう）の成立を読み解く。自力救済社会における武家と都市民の対峙が、やがて公儀を創出し、都市共同体を確立させることを明らかにする。
▼A5判・三三二頁／定価六、六一五円

室町・戦国期研究を読みなおす

中世後期研究会編

【内容】南北朝・室町期における公家と武家／南北朝期の守護論をめぐる／中世後期の在地領主研究／ものほどもどるのか／室町幕府宗教政策
論他
▼A5判・四〇八頁／定価四、八三〇円

織豊期主要人物居所集成

いどころ
藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所を通時的に追った研究者必携の書。

居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全であり、公にされることもきわめて少なかった。本書は、多くの研究者が複数の人物を取り上げ、居所情報を複眼的に確定した成果を一覧に供する。

・政権の中心人物、政権中枢の人物、有力大名、有力武将、僧侶・文人、公家、政権に関わる女性たち、総勢25名を収録。

・各章は、「略歴」「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

・辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

《収録人物一覧》

織田信長	豊臣秀吉	豊臣秀次	徳川家康	足利義昭
柴田勝家	丹羽長秀	明智光秀	細川藤孝	前田利家
毛利輝元	小早川隆景	上杉勝	伊達政宗	石田三成
浅野長政	福島正則	片桐且元	近衛前久	近衛信尹
西笑承兌	大政所	浅井茶々	孝藏主	北政所(高台院)

《執筆》(五十音順)

相田文三(虎屋文庫研究主事)／穴井綾香(九州大学大学院特別研究者)／尾下成敏(京都大学等非常勤講師)／柚田善雄(大手前大学教授)／中野等(九州大学大学院教授)／早島大祐(京都女子大学准教授)／福田千鶴(九州産業大学教授)／藤井讓治(京都大学大学院教授)／藤田恒春／堀新(共立女子大学教授)／松澤克行(東京大学史料編纂所助教)

【6月刊行予定】

▼B5判・四六〇頁／定価七、一四〇円

たとえば、天正10年6月2日 本能寺の変、そのとき・・・

織田信長——京都

未刻とも(『別本兼見』)、申刻ともいう(『兼見』)。6月1日諸家の御礼を請け(『兼見』『別本兼見』『言経』)、勅使を迎える(『晴豊』)。2日未明、本能寺で明智光秀の襲撃を受け被害する(『晴豊』『兼見』『別本兼見』『言経』はか)。

豊臣秀吉——備中高松

松与申城取巻候(『満江文書』)。9日高松城を包囲中(同日付村上元吉・武吉宛毛利輝元書状(『備中境事、于今羽柴令居陣候(『村上文書』)。そして6月2日の本能寺の変まで備中高松城を包囲する。

徳川家康——堺

6月2日堺→宇治田原、3日宇治田原→山田→朝宮→小川、4日小川→向山→丸柱→石川→河合→柘植→鹿伏兎→関→亀山→庄野→石薬師→四日市→那古(『石川忠経留書坤』『愛知織豊1』)。同日大浜着(『家忠』)。5日、13日岡崎在(『家忠』)。14日岡崎→鳴海(同日付吉村氏

柴田勝家——魚津

が、勝家らは守備を堅固にして、景勝を寄せ付けなかった。5月26日、景勝や松倉城に籠もる上杉勢が越後へ退いたことで、魚津城は孤立する。そして同城は勝家ら織田勢の手に落ちた。6月3日の出来事である(『富山・近世』『上越別2』『公記』)。

※〔 〕内は組見本(70%縮小)

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

【最新刊】

奥州と関東を主に、戦国期以降の仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会とのかわりを、東照宮や寛永寺を中心とした幕府権威をも視野にいれて考察。本所権威の在地社会への浸透、在地社会における諸宗教の共存と対抗、民衆宗教の展開とそれを規定する社会情勢、そして在地寺院など宗教施設の「場」としてのあり方を追求する。

第一編 南奥州における宗教と在地社会

奥州信達地域における惣社制の形成／近世中後期における惣社制を支えた人々／地方神職・修験の活動と在地社会／惣社制と地方神職の動向／靈山寺の復興と秩序形成／近世後期における南朝の顕彰と在地社会

第二編 関東における修験と在地社会

本山派修験の活動と真言・禅宗寺院／関東における本山派修験の存立事情／幕末期における修験の動向と在地社会／近世における禅宗寺院の機能と在地社会

第三編 民衆宗教の展開と近世国家

関東における富士信仰の展開と幕府権威／民衆宗教と本所権威

▼A5判・三六八頁／定価八、一九〇円
かんの・ようすけ：一九七五年福島県生。現在、駒澤大学非常勤講師・市立市川歴史博物館学芸員。

幕藩権力と寺院・門跡

思文閣
史学叢書

杉田善雄著

宗派・教団単位に考察されてきた従来の研究に対し、中世寺社勢力の中心であった顕密系寺院の近世的あり方を分析することによって、江戸幕府の寺院行政の展開をより明瞭に解明。

▼A5判・三二〇頁／定価七、五六〇円

熊本藩の地域社会と行政

吉村豊雄・三澤純・稲葉継陽編

近代社会形成の起点

永青文庫細川家文書に大量に残された地方行政記録綴「覚帳」や、村役人層をはじめとする住民の評価・褒賞記録綴「町在」の系統的分析を行い、19世紀段階の近世行政システムの全容を解明する。西国大藩としての熊本藩領内の地域社会像を描き出す意欲的論集。

▼A5判・四二〇頁／定価九、四五〇円

松前景広『新羅之記録』の

新藤透著

史料的研究

まつまえ かげひろ
中世から近世初期の北方史研究における最重要史料『新羅之記録』について、書名の読み方・その著者、全写本の収集・分類、著者が著作にあたった使用した史料、記述内容の信憑性、後世に編纂された史料に与えた影響の5課題について綿密に考証。

▼A5判・五一八頁／定価二二、六〇〇円

太子信仰と天神信仰

信仰と表現の位相

武田佐知子編

各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史、文学史、宗教史、芸能史の研究を集成し、時代とともに変化する信仰の形態や、それに付随するイメージの付与、宗派や地域を越えて多面的に利用されるそれぞれの信仰の進化形について明かす。

▼A5判・三五四頁／定価六、八二五円

風俗絵画の文化学

都市をうつすメディア

松本郁代・出光佐千子編

中世から近世における風俗絵画のメディア性に着目し、そこに描かれなかったものの持つ意味や享受者の視点、都の社会における聖と俗の姿、風俗絵画に表された芝居空間や行事のかたちの変化など様々な視点からアプローチする。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

大本山くろ谷 義戒光明寺 宝物総覧

発行・浄土宗 大本山くろ谷 金戒光明寺

法然上人によりひらかれた紫雲山くろ谷金戒光明寺には、
仏像・仏画・仏典・絵画・古文書など多くの文化財が蔵さ
れ公刊が望まれていた。約五七〇点の宝物全点を法然上人
八百年大遠忌にあたり、FMスクリーン高精細印刷による
オールカラーの大型図版で後世に残す。

◎目次◎

法然上人と金戒光明寺（法主 満誓
伽藍と庭園（写真 水野克比古

I 仏像・彫刻

II 仏画

III 絵画

IV 経典・仏教書跡

V 古記録・古文書

VI 書

VII 什宝・工芸他

歴代略譜と伽藍興隆（白壽顕成）

名墓録・くろ谷金戒光明寺備要

刊行物・年表・宝物目録

【最新刊】

▼A4判変型・五一六頁／定価二九、四〇〇円



西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本浄土教の祖師、法然の浄土教義、證空や行観の西山教義をまとめる。

▼A5判・三一〇頁／定価四、二〇〇円

法然伝と浄土宗史の研究

中井真孝著

浄土宗の形成過程を法然上人伝、中世浄土宗寺院、近世本末関係を中心に解明。

▼A5判・四三〇頁／定価九、二四〇円

浄土宗西山派と三鈷寺文書

さんごじ

大山喬平解説

京都大学文学部博物館の古文書第九輯
京都大学所蔵の古文書から代表的なものを写真で紹介・解説するシリーズ。

▼B4判・三二頁／定価二、一〇〇円

仏教思想と浄土教

水谷幸正著

学・行・信の課題に応えて研鑽を積まれた著者永年の業績を集成。

▼A5判・七二八頁／定価二二、六〇〇円

般舟讚私講

はんじゆさん

大塚靈雲著

『観経』一経の経説の次第を踏んで讀みあげる『般舟讚』の私訳私講を試みる。

▼A5判・五三八頁／定価三、六七五円

禿氏文庫本

とくし

大取一馬責任編集

龍谷大学名誉教授禿氏祐祥博士旧蔵の文庫から善本に値するものを影印公刊。

▼A5判・六七四頁／定価一四、七〇〇円

岡佳子著

【最新刊】

近世京焼の研究



色絵秋草文
徳利

◎近世の京焼、すなわち桃山時代から江戸時代末まで京都で焼かれたやきもの窯業的な変遷を文献史料と出土資料から明かし、そこに京焼の名工たちの生涯と作品を位置づけ、その特質を明確にした。◎名工たちの陶業を産業としてとらえ、技術の承継や産業的な展開、受容層のあり方、流通・市場の動向などの視点から京焼陶工の実態やその作風、あるいは京焼の通史を見直した一書。

目次

序◆「京焼」研究史をめぐる

第一部「京焼」の創始と諸国のやきもの

一 京焼の黎明―軟質施釉陶器の時代―

二 桃山から江戸時代初期の茶陶流通と京都

第二部 京焼窯場の成立と仁清

三 登窯の導入と内窯窯場の展開

四 京焼の茶入

五 京焼のなかの高麗茶碗

六 京焼のなかの御室焼―仁清色絵茶碗を中心に―

第三部 京焼の展開と乾山

七 前期清水焼の諸相

八 京焼色絵の展開―いわゆる「古清水」をめぐる―

九 京焼のなかの乾山焼

第四部 後期京焼の諸相

十 後期京焼の胎動

十一 後期清水焼の変遷

十二 京焼における復古と創造

十三 京焼陶工と国焼

おか・よしこ 一九八一年京都女子大学大学院文学研究科修士課程修了。
二〇〇八年博士(芸術学) 筑波大学。現在、大手前大学総合文化学部教授。

▼A5判・四三〇頁／定価六、六一五円

松花堂昭乗と

瀧本流の展開

山口恭子著

【最新刊】

瀧本流の書について、造型的な面のみならず、昭乗の著述した文芸作品、瀧本流の法帖など、文献資料や版本に対する細やかな検討を行うことにより、近世の書道史、出版史、文化史など広範な研究分野に新しい知見を提供する。

第一部 松花堂昭乗の伝と文書

一 「芳野道の記」善本考

二 「松花堂画帖」の刊行をめぐる

三 佐川田昌俊「松花堂行状」について

第二部 瀧本流の流行と展開―法帖の出版状況を中心に―

一 瀧本流の流行と展開

二 「本朝名公墨宝」の編纂と受容

三 「本朝名公墨宝」諸版考

四 「本朝名公墨宝」書誌解題稿

五 細合半齋と書肆藤屋弥兵衛―瀧本流中興の背景―

第三部 松花堂昭乗年譜稿

やまぐち・きょうこ 二〇〇五年法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻博士後期課程修了。現在、都留文科大学文学部非常勤講師ほか。

▼A5判・三五六頁／定価九、〇三〇円

近世琵琶湖水運の研究

杉江進著

古代以来、全国流通路の中でも重要な位置を占めていた琵琶湖水運の近世について、より歴史的な視点からその全体像や特徴を描き出す。著者が琵琶湖水運史上重要な湊の自治体史編纂に関わる中で出会った史料と丹念に向き合い、あたたためてきた研究成果。

▼A5判・四六四頁／定価九、四五〇円

いけばなにみる 日本文化

明かされた
花の歴史

最新刊

鈴木榮子著

古代の供花から現代のいけばなにいたるまで、日本文化に一貫して継承されてきた精神とは、「生」への意識すなわち生命を尊ぶ思想である――

「お稽古事」としてとらえられがちで、外形の歴史にしか注目されてこなかったいけばな。その精神にはじめて学問的な光をあて、日本文化という大きな枠組みの中にとらえる。外国人向けの「英語でいけばな」教室を主宰する著者が、時間の経過、流派の差異を超え、いけばなに継承される精神を探る。図版多数掲載。

【立てる】

供花の日本化

立花

【いける】

抛入花

芸道としてのいけばな

世間からみる立花・いけばな

【継承する】

盛花

戦後の花道界

考察「いけばなにみる日本文化」



▼四六判・二三八頁／定価二、七三〇円

すずき・えいこ：元日本航空国際線客室乗務員。結婚退職後カナダ・アメリカ滞在を経て広島に帰国。一九八三年から「英語でいけばな」クラス開講。

広島大学・広島女学院大学・宝塚大学大学院他非常勤講師。博士（芸術学宝塚造形芸術大学）。

花道古書集成「全五冊」

華道沿革研究会編

初期東山時代の代表的秘伝書をはじめ、江戸初期、中期の諸流祖の花道書から幕末に至る主な花道書を収録し、大日本華道会より昭和5年に刊行されたものの復刻。貴重な文献と作例図により生花の歴史・理論・技法の真髄に触れることができる。

▼A5判・総三四〇〇頁／定価三三、六〇〇円

続花道古書集成「全五冊」

続花道古書集成刊行会編

未刊の古写本に重点をおいた続編。花道草創の室町時代初期から各流各派成立、爛熟の時期江戸時代末に至る秘伝、稀覯本を網羅し、中でも「華厳秘伝之大事」「極儀秘本大巻」「藤掛似水華伝書」「諸花掬入百瓶圖」「雲の上」などは特筆すべきである。

▼A5判・総二七一〇頁／定価三六、七五〇円

藤村庸軒をめぐる人々

白奇顕成著

本書は、一族の人々・門弟達・儒教の師・茶道の師・友人の儒者・医師達の事蹟をたどることで、現在も続いている庸軒流の開祖・藤村庸軒の実態について新たな角度からのアプローチを試みる。巻末には「藤村庸軒流茶譜」を収録。

▼A5判・七八二頁／定価一七、三二五円

茶譜「全三冊」

谷見・矢ヶ崎善太郎校訂

茶湯古典叢書 五

近世茶書としては最も大部にして体系的なものの一つである茶譜（全18冊）は、利休・織部・遠州・宗和・宗旦のそれぞれの茶匠とその時代の茶湯を、確かな情報に基づいて茶湯の分野ごとに再編集したものである。西尾市岩瀬文庫蔵本を底本とし、現存する諸本と校合して全編活字化。挿図についても別冊の写真版で全て収録。

▼A5判・本文篇七五六頁・図版篇一六八頁／定価二一、〇〇〇円

一八世紀日本の

文化状況と国際環境

笠谷和比古編

〔6月刊行予定〕

日本の一八世紀社会は、儒学・文学・博物学・蘭学等各分野において多くの成果を生み出し、近代化に多大な影響を与えた。それはいかにして形成され、どのような影響を受けつつ、展開を示したのか。多角的にアプローチした国際日本文化研究センターの共同研究成果。

内容

〔序論〕笠谷和比古◆一八世紀日本の「知」的革命Intellectual Revolution
〔思潮〕宮崎修多◆江戸中期における擬古主義の流行に関する臆見／竹村英二◆太宰春臺における古文の「體」「法」重視／前田勉◆一八世紀日本の新思潮／フレデリック・クレインス◆蘭方医が受容した一八世紀の西洋医療／松山壽一◆昌益とシェリング／和田光俊◆享保期における改暦の試みと西洋天文学の導入／小林龍彦◆漢訳西洋曆算書と『天学雜録』(経済と社会)長谷川成一◆一八世紀新興問屋商人の広域の活動とネットワーク／平井晶子◆東北農村における家の歴史人口学分析／藤實久美子◆江戸書物問屋の仲間株について／ヘルベルト・ブルトチョウ◆江戸時代の日本人は日本をどう発見したか〔文化の諸相〕武内恵美子◆熊沢蕃山の楽思想と一八世紀への影響／小林善帆◆一八世紀のいけ花／森田登代子◆大嘗会再興と庶民の意識／魚住孝至◆一八世紀における武術文化の再編成／郡司健◆享保期の異国船対策と長州藩における大砲技術の継承〔国際交流〕武井協三◆歌舞伎と琉球／中国／真栄平房昭◆琉球の中国貿易と輸入品／平木實◆一八世紀朝鮮国の儒学界とそれがみた日本の儒学／高橋博巳◆ソウルに伝えられた江戸文人の詩文／岩下哲典◆一八世紀／一九世紀初頭における露・英の接近と近世日本の変容／佐野真由子◆引き継がれた外交儀礼

かさや・かずひこ…京都大学大学院文学研究科博士課程修了(国史学)。
現在、国際日本文化研究センター教授。

▼A5判・五五〇頁／定価八、九二五円

「公家と武家」全5冊シリーズ



国際日本文化研究センターで行われた公家(貴族)と武家に焦点を合わせた共同研究成果シリーズ。武士層が成長した地域と、文官支配が優越した地域との差異に着目。前近代社会における支配エリートであったそれらの身分や職能のもつ意味、その秩序の形式、社会的役割といったものを多角的に検討した論集。

- 公家と武家 その比較文歴史的考察 村井康彦編
 一九九五年刊 ▼A5判・四四四頁／定価八、一九〇円
 公家と武家Ⅱ「家」の比較文歴史的考察 笠谷和比古編
 一九九九年刊 ▼A5判・五三〇頁／定価九、八七〇円
 公家と武家Ⅲ 王権と儀礼の比較文歴史的考察 笠谷和比古編
 二〇〇六年刊 ▼A5判・四五八頁／定価八、一九〇円
 公家と武家Ⅳ 官僚制と封建制の比較文歴史的考察 笠谷和比古編
 二〇〇八年刊 ▼A5判・五四四頁／定価八、九二五円
 公家と武家の比較文歴史 国際シンポジウム 笠谷和比古編
 二〇〇五年刊 ▼A5判・四九〇頁／定価八、四〇〇円

東アジアの本草と博物学の世界

山田慶兒編

(全2冊)

18世紀、西洋の大航海時代と植民政策、日本の幕府・諸藩の殖産政策と外国貿易により、日本で遭遇した博物学と本草学。それらにおける知的冒険の展開を、学問・産業・芸術のような分野への影響をも含めて、多角的に考察した21篇。国際日本文化研究センターでの共同研究。

▼A5判・各三七〇頁／定価(各七、八七五円)

近世東アジア海域の文化交渉

松浦章著

古来、東アジア海域を舞台にした人や物の交流で活躍したのは、中国帆船であり、その状況は汽船の登場まで変わらなかった。本書はおもに清代帆船の活動に注目して、日本・中国・朝鮮・琉球をはじめとした東アジア諸国の交流の諸相を明らかにする。

▼A5判・四七二頁／定価九、四五〇円

一六世紀

イングランド農村の

資本主義発展構造

松村幸一著

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書⑱

故・松村幸一氏（大阪経済大学名誉教授）は、膨大な数にのぼる、16世紀イングランド農村における資本主義発展に関する論文を書き残されたが、二〇〇八年二月享年78歳で逝去され、その業績は分散したままになっていた。本書は、そのうち主要な論文をまとめ、巻末に参考文献一覧と索引を付した。

第1部 イングランドの農業資本主義化をめぐる二つの対抗

第1章 「ケットの反乱」について

第2章 封建制から資本主義への移行の形態

第3章 イングランド東部の農業ブルジョア化をめぐる二つの対抗

第2部 イングランド農村構造

第4章 サセックス臨時課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第5章 バッキンガムシア臨時課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第6章 ノーファーク州ギヤロウ郡臨時課税簿の分析

第7章 レスタシア・ガスラクストン郡の諸階層とその動向

第8章 サファク州臨時課税簿（一五二四～一五五年）の分析

第9章 サファク州ベイバー郡の軍役調査記録（一五二三年）について

第10章 サファク州における民衆運動

【5月刊行予定】 ▼A5判・六六〇頁／定価一四、七〇〇円

まつむら・こういち：一九二九年京都市生。大阪経済大学経済学部長、同大日本経済史研究所所長等を歴任。

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書⑴⑦

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流
大阪経済大学日本経済史研究所編

「近世・近代の東アジア経済史研究」（二〇〇七年大阪経済大学日本経済史研究所主催）の成果10篇。

▼A5判・三四四頁／定価四、二〇〇円

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。日中両国の広範な資料を用いることにより、詳細かつ中立的・客観的な立場での考察を試みる。

▼A5判・三六四頁／定価七、一四〇円

王権と都市

今谷明編

国際日本文化研究センターでの研究の集大成として、編者が壮大な展望のもと組織した共同研究「王権と都市に関する比較史的研究」の成果。各時代・各地域での都市史のあり方を相互に比較検討し、「都市とは何か」という命題の解明に挑んだ一書。

▼A5判・三七二頁／定価七、一四〇円

武士と騎士

日欧比較中近世史の研究

小島道裕編

人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」の一環として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。多様な視点から武士と騎士をとりあげた論考19本を収録。〔内容〕Ⅰ領主と武力／Ⅱ城の形と機能／Ⅲ資料とイメージ／Ⅳ理念と言説

▼A5判・五二二頁／定価九、四五〇円

近代日本と地域振興

京都府の近代

高久嶺之介著

【最新刊】



亀岡市王子橋

本書は、近代日本の地域社会の姿を、京都府下の京都宮津間車道の開鑿、琵琶湖疏水と鴨川運河の開鑿、天橋立の保存とその振興・童仙房村の開拓という特定のテーマを取り上げ、地域振興の視点から考察。またその地域社会における様々な要求の噴出や地域改善の動きを、著者自身のフィールドワークの成果も取り入れつつ、交通体系の変化・新技術と議会の導入などの問題を踏まえ、政治行政史と社会史を組み合わせてつづさに描き出す。

◆ 内容 ◆

1 車道時代の到来

京都宮津間車道開鑿工事／明治前期の国と京都府の道路政策／京都宮津間車道開鑿以前の丹波・丹後への道／車道開鑿工事の契機と当初の計画／道幅の設定／道路路線をめぐる争い／開鑿工事の進捗状況／栗田峠の開鑿／開鑿工事にかかわる諸問題／車道のその後

〔補論〕区町村土木補助費による

道路開鑿

区町村土木補助費の府会での論議／区町村土木補助費施行の事例／伊賀街道新道

2 琵琶湖疏水工事の時代

琵琶湖疏水開通のイベントとジャーナリズム／水力電気利用問題／鴨川

運河問題／背景と北垣の行政

3 天橋立の近代

景観保存と地域振興／天橋立国有林時代／天橋立公園の成立／与謝郡立公園としての大正期の天橋立／府立公園としての昭和戦前期の天橋立／敗戦直後の天橋立

4 開拓村の近代

京都府相楽郡童仙房村の軌跡／童仙房の自然と今／童仙房開拓の開始／童仙房村の成立と童仙房支庁の創設／村誕生後の童仙房／紛争と歎願、そして童仙房支庁の廃止／明治中後期から大正期の童仙房の概観／小学校的維持／官有山林払い下げの請願／昭和戦前期の童仙房／昭和戦後の童仙房

たかく・れいのすけ：同志社大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、同志社大学人文科学研究科教授を経て、京都橘大学文学部教授。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

北垣国道日記「塵海」 塵海研究会編

明治期の京都府知事・北垣国道による日記を、塵海研究会が十五年間にわたり翻刻した成果。北垣が京都府知事に就任した年からは、北海道庁長官・拓殖務次官時代を経て、京都隠棲までのさまざまな活動や多くの人々との交流を記録。また、京都のみならず中央政治史や地方自治・土木史・北海道史研究の進展に寄与する第一級資料。

塵海研究会編集担当／小林文広、白木正俊、末岡照啓、高久嶺之介

▼A5判・六五二頁／定価一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究 小股憲明著

体系的な研究がされてこなかった明治期の不敬事件を網羅。豊富な実例を通じて明治国家の特質を考察し、天皇制と教育の関係、ひいては天皇制と近代日本および国民の関係を明らかにする。

▼B5判・五七六頁 定価一三、六五〇円

近代京都研究

丸山宏・伊從勉・高木博志編

普遍性と特殊性を射程に入れながら、近代史を中心に分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した京都大学人文科学研究科・共同研究「近代京都研究」の成果。

▼A5判・六二八頁 定価九、四五〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著 佛教大学研究叢書 第二次日韓協約から第一次朝鮮教育令発布後、すなわち韓国「併合」前後の期間に着目し、修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育を、多彩な史料に基づき明らかにする。

▼A5判・三〇〇頁 定価五、八八〇円

みやこの近代

丸山宏・伊從勉・高木博志編

京都大学人文科学研究科「近代京都研究会」で論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとにした八五篇。『京都新聞』での連載を再構成し、まとめたもの。

▼A5判・二六八頁 定価二、七三〇円

新島襄を語る ⑧

本井康博著

ビーコンヒルの小径

【最新刊】

「新島ワールド」のコンシエルジュ（案内人）と自他ともに認める著者が、話し言葉でその魅惑の世界を紹介する入門書の最新刊。「ビーコンヒル」とは、新島襄がアメリカ留学時拠点とした、古都ボストンの地域の名前。本冊では、新島ゆかりのボストンを語り、複眼で捉えた新島像を提示する。



シリーズ
既刊

- ①千里の志
- ③錨をあげて
- ⑤元祖リベラリスト
- ⑦ハンサムに生きる

- ②ひとりは大切
- ④敢えて風雪を侵して
- ⑥魂の指定席

▼四六判・平均二五〇頁／各定価一、九九五円

近代新潟におけるプロテスタント

本井康博著

本格的な新潟教会通史の三部作。新潟教会が果たしてきた歴史的作用を解明。

▼B5判・五四〇頁／定価三、一五〇円

近代新潟におけるキリスト教教育

本井康博著

新潟女学校と北越学館

【残部僅少】▼B5判・三二二頁／定価三、一五〇円

アメリカン・ボード200年

本井康博著

同志社と越後における伝道と教育活動

▼B5判・六七六頁／定価五、二五〇円

同志社女学校史の研究

宮澤正典著

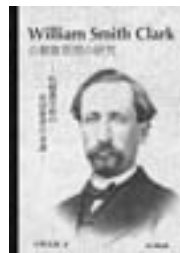
現在の同志社女子大学・同志社女子中学校・高等学校の前身である「同志社女学校」その一八七七年（明治10）創設から一九四五年（昭和20）までについて、新島襄と女子教育、同志社女学校と朝鮮、昭和戦時下の同志社女子部など、個別詳細に論じる。



▼A5判・三七四頁／定価二、九四〇円

William Smith Clark の
教育思想の研究

小枝弘和著



札幌農学校の自由教育の系譜
アメリカに存在するクラーク関連資料や、手紙、草稿類などの活字化されていない資料をも十分に活用し、幼少期にさかのぼって彼が過ごしてきた環境をできるだけ明らかにすることで、その教育思想や実践の特質の主要因を究明する。

▼A5判・三八〇頁／定価三、一五〇円

異文化・交流のはざまで

竹中正夫著

日系二世の童話作家として多くの栄誉を受けた内田淑子の生涯をつづる。

内田淑子のルーツと生活

▼A5判・二三〇頁／定価一、九九五円

与謝野晶子と 小林一三

逸翁美術館編

阪急東宝グループを興し、明治・大正・昭和の実業界で活躍した小林一三。数寄者としても知られ、文化の大庇護者であった。与謝野晶子もまた、小林一三がその才を見込み、支援した作家である。晶子が一三に贈った「源氏物語礼讃歌」短冊全五四枚(カラー)、これを詠むきっかけになった、上田秋成筆「源氏物語短冊貼交屏風」(カラー)をはじめ、その由来を記した手紙や、交流を物語る資料一二六点を収録した、逸翁美術館特別展覧会の展示図録。

- 第I章 歌百首屏風
- 第II章 大正六年の晶子
- 第III章 晶子「源氏物語礼讃歌」の展開
- 第IV章 晶子の詠歌活動
- 第V章 晶子の新出書簡
- 第VI章 書簡で見る寛・晶子夫妻と二三の交流



▼A4判・九六頁(カラー三六頁)／定価一、〇五〇円

与謝野晶子の 「源氏物語礼讃歌」

伊井春樹(逸翁美術館館長) 著

小林一三による与謝野家への物心両面での庇護下、「源氏物語礼讃歌」が詠まれた背景、いつ秋成の短冊屏風を目にしたのか、さらには晶子自身においても、代表作としての認識がどのように醸成されていたのか、逸翁美術館特別展覧会のテーマをより深く追求めた一書。

- 第1章 晶子の大阪行き
- 第2章 関西、九州への旅の成果
- 第3章 歌人仲間河野鉄南
- 第4章 晶子の歌行脚
- 第5章 「源氏物語講義」の執筆
- 第6章 鉄幹の欧州遊学
- 第7章 鉄幹の悲運と晶子の悲しみ
- 第8章 「源氏物語礼讃歌」の短冊



▼四六判・二二〇頁／定価一、四七〇円

越境する漱石文学

【5月刊行予定】

坂元昌樹・西楨偉・福澤清編

漱石の生涯にはたびたびの「越境」が認められる。それは青年期から壮年期にかけての松山・熊本・ロンドンでの漂泊に顕著であるが、それは「越境」の実践ではなかったのか? 第1部において、漱石と世界文学との関わりを考察。第2部において「越境」の実践としての「漱石と熊本」という視点から、漱石の熊本時代の評論、エッセイ、交友関係を考察する。

▼四六判・二八〇頁／定価二、九四〇円

日本文学の「女性性」

二松学舎大学
学術叢書

増田裕美子・佐伯順子編

紫式部・清少納言……、世界の文学史上に輝く女性作家たち。『土佐日記』にみられる紀貫之の女語り。日本文学の根底にある「女性性」が近代文学ひいては現代の様々な文学作品の中に受け継がれ、物語を紡ぎだしている。「純文学」からライトノベルまで多様な角度からアプローチした9論文を収録。

▼A5判・二三三頁／定価二、四一五円

美の縁

び

よすが



河井寛次郎の陶芸の仕事は、おおまかに三つの時期に分けることができます。まずひとつ目が大正期の中国・朝鮮古陶磁を倣った作品群、次に大正末期より浜田庄司を通じて柳宗悦と親交を結び「民藝運動」の中心メンバーとして「用の美」を意識した作品群、そして戦後、寛次郎の作風はまた変化し、「民藝」の枠を超えた独自の造形美を持った作品群となります。

この作品で用いられている技法は「打釉」うちぐすりと呼ばれ、造形だけでなく釉薬の使い方にも自由な発想をめぐらせたもので、寛

❖ 三色扁壺 ❖ 河井寛次郎

次郎が晩年に多用した技法です。柄杓ですくった、黒、赤、緑の釉薬を作品に向かって打ちつけるように投げかけます。アクション・ペインティングともいうべきこの方法によって、それぞれがあざやかに色を放ち、抽象画のような風合いを生みだしています。

自分の感性に従い、自由に生まれてくる形を作品にした河井寛次郎の果てしない創造性を感じることができるでしょう。

(ぎやらりい思文閣・前田遼子)

思文閣出版 事務所移転のお知らせ

小社は今まで、京都市左京区百万遍で出版活動を行ってまいりましたが、このたび6月27日（月）より、東山区に事務所を移転することになりました。グループ会社である株式会社思文閣の本社ビル内に移ります。グループの総力を結集して文化活動を行ってまいりますので、より一層のご愛顧を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



駐車場はありません

2011年6月27日より上記に移転します

株式
会社 思文閣出版

Shibunkaku Publishing Co.,Ltd

605-0089 京都市東山区古門前通大和路東入る元町355 ☎075(751)1781代/F075(752)0723
ホームページ <http://www.shibunkaku.co.jp/> e-mail: pub@shibunkaku.co.jp
（※6月26日まで 〒606-8203 京都市左京区田中関田町2-7 電話、Faxは かわらずお使いいただけます）